

Bohdan Paczyński 先生を追悼して

戸谷友則 (京都大学大学院 理学研究科)

e-mail: totani@kusastro.kyoto-u.ac.jp

数多くの業績で世界的に著名な理論宇宙物理学者である、プリンストン大学の Bohdan Paczyński 氏 (Lyman Spitzer, Jr., Professor) が 4 月 19 日に逝去された。ポーランドのご出身で、享年 67 歳であった。3 年ほど前から脳腫瘍を患われ、一時は絶望的な状況と伝えられた。その頃、私もプリンストンに氏を訪ねたがたいへんな衰弱ぶりで、彼自身が「私に残された時間は長くはない」とおっしゃっていた。だが、実験的な化学療法が奇跡的に功を奏して劇的に回復し、一時は仕事に復帰して論文まで出版されるほどであった。しかしながら昨年秋ごろから再び体調を崩され、闘病むなしく帰らぬ人となられた。多くの人が切望した二度目の奇跡はついに起こらなかった。彼の薫陶を受けた日本人研究者の一人として、この機会に彼の人柄が偲ばれるエピソードなどを書き留めておきたい。以下では親しみをこめて Bohdan と呼ばせていただく。

Bohdan の業績はあまりに多く広範で、とても簡単にまとめることはできないが、特に有名なのはマイクロレンズ現象とガンマ線バースト (GRB) に関する研究であろう。大マゼラン雲の星が重力レンズ現象により増光することをモニターして暗黒物質を探すという MACHO 実験のアイデアは彼が出したものである。その後、マイクロレンズ現象は実際に発見され、今では暗黒物質のみならず、惑星探査などにも応用され一大分野を築いている。GRB に関して言えば、理論的考察から GRB が超相対論的なアウトフローでなければならないという GRB 理論モデルの出発点を築いたとともに、GRB が宇宙論的な遠方からきているという考えを早くから提唱していた。「渦巻き星雲が系外銀河なのか系内のガス雲なのか」という Shapley と Curtis の “The Great Debate” の現代版として、90 年代前半に「GRB が系内な



Paczyński 氏のご自宅での夕食会の様子。左から、Paczyński 氏、住夫妻、Laurent Eyer 氏 (現在、ジュネーブ天文台)。筆者撮影。

のか系外なのか」という大論争を D. Lamb と繰り広げたことは有名である。ちなみにその決着は……ご存じのとおりである。

Bohdan の研究の特徴は、精密なモデルの構築や高度な計算などの「力わざ」というよりは、むしろばぬけて鋭い直感により斬新かつ天才的なアイデアを提示して次の研究の大きな流れをつくるというものであった。そうした彼の「カッコ良さ」に憧れた若手理論研究者は私も含めて世界中に数多くいるに違いない。私自身の幸運は、ある GRB 国際会議の総合報告で彼が私の論文をたいへん誉めてくださったことがきっかけで、東京大学の須藤 靖氏の仲介により、その Bohdan のもとで 2 年ほど研究する機会を得たことであった。

私がプリンストンに着いたのは平成 13 年 8 月、ほど近いニューヨークである同時多発テロが起きる一月前のことである。慣れぬ海外生活や英語に苦しむ私に、Bohdan は本当に手厚く面倒を見てくれた。退職する事務員のお宅に不要となるベッドがあると聞き二人で訪れ、クイーンズサイズの大きなベッドを彼と私と二人で大汗をかきながら

私の新居に運んだことが昨日のこのように思い出される。私にとって憧れの存在の大先生にここまでしてもらってよいのかと、かえって恐縮するほどであった。

Bohdan はサイエンスに対して本当に純粋な情熱をもった人で、子供のようないきいきとした好奇心を最後まで失わなかった。映画“Back to the Future”でタイムマシンを発明する天才科学者「ドク」に雰囲気や風貌が似ているとよく言われたものだ。そんな彼が最も大切にし、輝いていたのがコーヒータ임である。毎日朝 10 時すぎから、スタッフ、PD、学生を問わず人が集まり、その日に新着した astro-ph 論文を見ながら会話が弾む。Bohdan は常にその中心であり、新しい論文やニュースに目を輝かせながら、“Oh my goodness!”を何度も繰り返す彼の表情が今でも懐かしく目に浮かぶ。

一方で、こんなこともあった。近くにある高等研究所では、John Bahcall 氏が中心となり、毎週火曜日に Astrophysics Lunch というものが開催されていた。(Bahcall 氏が数年前に逝去された後は氏にちなんで John Bahcall Lunch となっていて続いているそうである。)プリンストンの研究者やゲストなどそうそうたるメンバーが顔をそろえ、たいへんに高度な内容で充実した会なのであるが、厳格なことで知られる Bahcall 氏が司会をす

る中、その雰囲気は少々権威主義的というか、少なくともくつろげるものではなかった。Bahcall 氏が不在の場合は他の重鎮スタッフが代役を勤めるのだが、あるとき Bohdan にもその依頼があったらしい。ところが、Bohdan は「僕はそういうのはエンジョイできないので」と言って断ってしまったそうである。彼が多くの人から愛され親しまれたのは、このような人柄も一つの理由なのであろう。

そのような彼のもとで私は本当に自由に研究をさせていただいた。Bohdan は私の主体性を尊重してくれて、私の論文で共著者となることはなかったが、私の当時の論文の多くは彼との議論からインスパイアされたり改善されたりしたものである。

結局、3 年前に訪問したのが、私が見た彼の最後の姿となってしまった。彼のサイエンスにかけた情熱や精神を、微力ながら私の周囲の若い学生に伝えていくことで彼への恩返しとしたい。京都は今、新緑がまぶしい季節を迎えている。プリンストンの新緑もまた、見事なものであった。そろそろ蛍が飛び交っているころだろうか。彼の死によって、私のなかのプリンストンの思い出がまた一つ遠く、夢の世界ようになってしまった寂寥の念を、今私は禁じえないでいる。ただ、ご冥福をお祈りするばかりである。